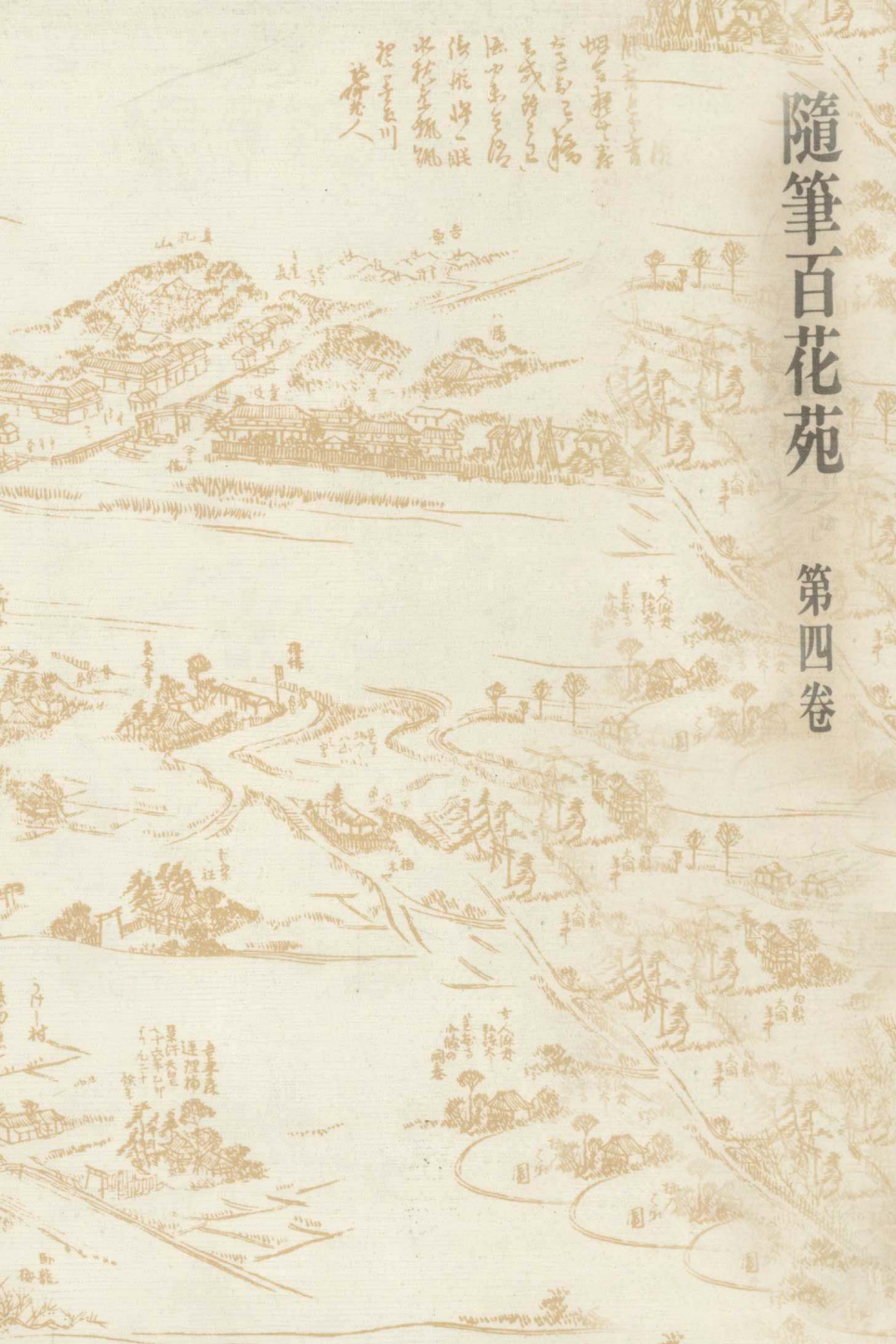
隨筆百花苑

第四卷



隨筆百花苑

第四卷

森銑三
野間光辰
中村幸彦
朝倉治彦
編

中央公論社

隨筆百花苑　第四卷

定價　三五〇〇圓

昭和五十六年四月一日印刷
昭和五十六年四月十日發行

編者　森銑三
　　野間光辰
　　中村幸彦
　　朝倉治彦

發行者　高梨茂

印刷者　山田博

發行所　中央公論社
〒104 東京都中央區京橋二―八―七
振替東京二―三四

©一九八一　檢印廢止

隨筆百花苑　第四卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

跋言　賴祺一

凡例

春水掌錄　賴春水　一三

壬子作遊日記（寛政四年）　一五

壬子東下日程暦（寛政四年）　五五

壬子掌錄（寛政四年）　七二

癸丑掌錄（寛政五年）　八九

癸丑西上日程暦（寛政五年）　一〇六

甲寅年抄書（寛政六年）　一一九

掌錄　甲寅—庚申（寛政六—十二年）　一三四

掌錄　庚申—辛酉（寛政十二—享和元年）　一五七

霞關掌錄　一—四（享和二—三年）　一七八

掌錄 五—十六（享和三—文化十二年） 二一八
癸酉有馬往還日記（文化十年） 三二七
濃州信州採藥記 大窪舒三郎 三四三
解題 三八五

敍言

賴　祺　一

『隨筆百花苑』第四巻は、「傳記日記篇四」として、賴春水の『春水掌錄』と大窪昌章の『濃州信州採藥記』を收めた。

賴春水は、のちに、その子の山陽が文壇においてあまりにも有名な人物となったことにより、山陽の父親としてか、あるいはせいぜい時流に乘った謹嚴な朱子學者であったという程の評價しかくだされていないように思われる。もっとも、同時代の學者・文人の多くが忘れ去られつつある現在、山陽の父親ということで名の殘る春水は、春水自身の意とは反することかもしれないが、まだ仕合わせであるかもしれない。しかし春水は、當代一流の學者として、廣島藩儒として、世子および藩士子弟の敎導に生涯をささげた敎育者であり、人の師としての誇りをもち、眞摯な研究態度をつらぬきとおした人であり、すくなくともその生存中は、封建の世の異端兒山陽とは、比較にならない高い評價をうけていたのである。そのことは、既に世に出ている關係資料、とくに天明元年から文化十二年までの三十五年におよぶ

『日記』によってうかがうことができるが、さらに本書において『掌錄』が公にされることによって明白になるであろう。人間の評價は、同時代に生きた人びとのそれをまず尊重しなければなるまい。

『春水掌錄』は、寛政四年からこれも歿する前年の文化十二年までの『掌錄』二十一點と紀行四點とからなる。春水四十七歳から七十歳までの、後半生二十四年間の足跡があますところなく記されている。春水の生涯は、在坂時代と天明元年廣島藩儒に登用されて以後の二期にわけてその生き方を考察することができるが、藩儒となってからは、享和三年までの江戸詰にあけくれた時期とその後に區分することもできる。春水の人となりや志向の形成については、明和・安永期の大坂という都會のもつ雰圍氣、とくに知識人のサロンともいえる混沌社同人との「自由」な交流が、決定的ともいえる意味をもった。『掌錄』にあらわれる春水の關心の所在が、そのことを最もよく示しているといえよう。『掌錄』はほぼ江戸詰後半期から始まるが、春水の江戸における交友の範圍は實に廣い。藩儒の立場として「自由」は制約されているが、在坂時代とはちがった文人社會の中に生きることができたのである。そして「自由」な境涯に生きる友——菅茶山や西山拙齋や混沌社時代の友人たち——をこよなく愛した。紀行中の簡潔な文章がそれを傳えてあまりある。ほんの些細な記事が、春水の日々にとって大きな意味をもったであろうことも。さらに『春水掌錄』は、春水の傳記資料としてだけでなく、文事に關しては高度の情報を得る立場にあった人物の記錄として、十八世紀末期から十九世紀前期のわが國の文化的動向の一端をうかがわせてくれる內容と資料的價値をもつ。

『濃州信州採藥記』は、尾張家中の本草學者大窪昌章が、藩命をうけ御藥園御用出役として、天保七年

の四月と七月の二度にわたり、美濃國可兒郡久々利山・錦織山、同國惠那山方面、信濃國筑摩郡木曾御嶽山・繼母ヶ嶽方面へ採藥に出張した時の調査記錄である。隨筆・紀行としての面白さ、記錄としての價値の高さとあわせて、天保飢饉が猖獗をきわめた時期であるだけに、該地方の民情風土、物産の狀況をうかがう資料としても、まことに貴重なものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

一、本文については、「春水掌錄」「濃州信州採藥記」ともに著者自筆原本によって校訂した。

一、漢字は正字體を使用し、古字、別體字、俗字などは通行の字體に改めたが、底本の字形をそのまま殘す必要のある文字はそのままとした。

一、底本に句讀點は施されていないが、讀み易いように適宜これを施した。また漢文の句讀點、返り點、連字符についても必要に應じて補った。

一、原則として送り假名、振り假名は底本のままとしたが、濁點は、讀み易いようにこれを補った。但し時代的な特殊表記はこの限りではない。

一、假名の古體、變體、合字などは通行の字體に改めたが、平假名、片假名の別は底本通りとした。

一、原則として脫字、衍字、誤字、宛字は底本通りとしたが、その作品の特殊性を考え、固有名詞や明らかな誤字などは訂正するか、または行間に正しい字を（　）で添え、不明の場合は（ママ）とした。本文中の校訂者による注記は〔　〕で示し、本文と區別した。

一、底本の蟲喰い、破れ、汚れなどで判讀不可能の場合は、推定字數だけ□□を重ねて行間に注記し、推定可能の場合は、行間にその文字を示した。

一、底本に改行のない場合は必要に應じて改行した。
一、底本の簡單な書入れや注は本文の該當箇所に（　）して插入した。
一、巻末に「解題」を付し、作品及び著者の解説、校訂上の注意事項などを記した。

傳記日記篇四

責任編集　賴　祺一

春水掌錄

賴　春水

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com